東北 VALUE SIGHT
秋田

自らの子育てを通して、朝ごはんを食べていない子どもや学用品を買いそろえてもらえない子どもの存在を知り、“子どもの貧困”を身近な問題だと感じていた林多実氏は、「お腹を空かせている子どもたちに十分な食事をとってほしい」との思いで、「フードバンクあきた」を立ち上げた。
林代表は、同団体の活動が不要となる日が来ることを願いながら、食料支援、制服のリユース事業等に日々奔走している。

一般社団法人 フードバンクあきた　代表理事
林　多実（はやし・たみ）

1961年　秋田市生まれ
1981年　秋田聖霊女子短期大学卒業
　　卒業後は、東京都内の設計事務所に勤務
1994年　秋田に帰郷
2015年２月　「フードバンクあきた」立ち上げ
2016年８月　「フードバンクあきた」法人化

一般社団法人 フードバンクあきた
秋田県秋田市土崎港西２丁目３－24
E-mail：info@foodbankakita.com
URL：http://foodbankakita.com/

「もったいない」を「ありがとう」につなげる

サインに気づく

「おかえり」。ドアが開く音がしたので玄関へ迎えに出ると、当時小学４年生の娘はランドセルを下ろす間もなくその場で泣き出してしまった。理由を聞くと、クラスの男の子に叩かれたとのことだった。担任の先生に事情を話して確認してもらったところ娘の方には落ち度はなく、後日、その男の子は先生に促されて娘に謝罪をしてくれた。

私はその男の子について気がかりなことがあった。子どもたちが何気なく話すそれぞれの家庭の様子は、聞いた子どもの口からその親へと伝わるものだ。１学年１クラスの学校だったため、４年生まで一緒に過ごしていれば、子どもの同級生の家庭の様子も少なからず分かるようになっていた。娘が低学年の時の担任は、毎日朝ごはんを食べてきたかどうかを確認していたのだが、彼は毎日「食べてこなかった」と答えていた。またある日の給食では、娘の好物がメニューだったのだが、彼が何度もおかわりをしたために娘はおかわりすることができなかったということもあった。彼には、朝ごはんを食べる習慣がなかった。

“子どもの貧困”は身近な問題

お腹が空くと大人でもイライラする。もし彼がきちんと朝ごはんを食べて登校していれば、娘を叩くという行動はとらなかったのではないか、と思われた。

また、PTA活動を通して、入学時にそろえなければならない体育着などの学用品を購入してもらえずにいる子どもがいるということを知った。これを受けて、卒業時には体育着を学校に寄付するよう、保護者に呼びかけを行うということも経験もした。

こうした経験を学区の異なる地域の友人に話してみると、それぞれに似たような経験をしていたことが分かり、地域や学校を問わず、一定の割合で貧困の状況にあると思われる子どもがいることに気づかされた。

思いを行動にうつす

ちょうどその頃、テレビで「フードバンク」の活動を知った。まだ食べることができるのに捨てられてしまう食品がある一方、食べるものに困っている人がいる。フードバンクは、そうした食品ロスの提供を受け、食べ物を必要とする人に届ける役割をする。「お腹を空かせている子どもたちに十分な食事をとってほしい」という思いで、2015（平成27）年２月、友人たちと共に「フードバンクあきた」を立ち上げた。立ち上げたとはいえ、課題は山積していた。物資をどのように集めるのか？活動の資金はどう集めればよいのか？

そんな折、見学のために仙台のフードバンクを訪れた際に知り合ったフードバンク岩手の方から、物資を提供してもらえることになり、何とか活動を始めることができた。

“子どもの貧困”は“家庭の貧困”

現在、全国的に「子どもの貧困」問題への関心が高まっている。「子どもの６人に１人が貧困」という事実に驚いた方もいるのではないか。

実際には、子ども自体が貧困であるというよりも、子どものいる世帯が貧困であると言えるのではないか。秋田県子どもの貧困対策推進計画では、ひとり親世帯の母子世帯のうち約70％が年収180万円以下の収入で暮らしているという実態が報告されている。

新しい取組 ～制服リユース～

平成28年度秋田市協働サポート交付金事業として「みんなde食堂」と「制服リユース」の２つの事業を始めた。食料支援の依頼を待つだけではなく、言い出せずにいる「困っている人」を探したい、また、一緒に食事をすることにより誰かとつながることの大切さを自分たちも実感したい、という気持ちがあったからだ。

「制服リユース」では、「中学、高校入学時にお金がかかりすぎる」という声を耳にしたことから、まだ着用できるのに家で眠っている制服を再利用できないかと考えた。これも、「もったいない」気持ちが必要としている人の手に渡ることで「ありがとう」という言葉に変わるという、フードバンクの理念にまさにぴったりだと考えている。

今はインターネットの普及などもあり、ほしいものは、新しいかどうかにこだわらず、自分の希望の値段で購入することができるようになっている。しかし制服は、新品を定価で買わなければならない。私はこれを疑問に思う。新しいものを買う以外に、リユース品を利用するという選択肢があってもいいのではないか。貧困の状況にある家庭であっても、リユース品の利用により浮いたお金を学業に必要な参考書や電子辞書などの購入に充てることができるかもしれないと考えている。

貧困問題の解決への一助として

これまでの活動を通して、フードバンクが食料支援をするだけでは「貧困」の解決はできないということを知ることができた。貧困の状況にある世帯では、さまざまな要因が絡み合っている場合が多い。むやみやたらに支援する「ばらまき型」の支援ではなく、多様な機関と連携して支援する「寄り添い型」の支援をしてこそ、本当の意味でのセーフティーネットになるのだと思う。

県民の皆さまからの多くの支援に支えられて活動できていることに感謝の思いを抱きながらも、「フードバンク」が必要なくなる日が来ることを切に願い、これからも私たちは活動を続けていく。

福祉施設や生活困窮者へ送る支援物資。いろいろな種類の食品を届けられるよう、企業や個人から提供を受けた食品を仕分けして箱詰めしている。